

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：34101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520778

研究課題名(和文)『新撰姓氏録』の文献学的研究

研究課題名(英文)Philological study on Shisen-shojiroku

研究代表者

荊木 美行(Ibaraki, Yoshiyuki)

皇學館大学・研究開発推進センター・教授

研究者番号：60213203

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、9世紀に成立した『新撰姓氏録』のテキストについて考察を深めた。『新撰姓氏録』は現在では抄本しか残っておらず、しかも、原本の抄出の仕方が粗雑である。さらに、伝写の過程で生じた誤写や改変も少なからず存在し、抄本の復原や原本の体裁の類推は、『新撰姓氏録』研究の重要課題である。

そこで、本研究では、各地の写本の悉皆調査を進め、諸本を校合して、新たな校訂本作成に取り組んで、一応の粗案を得た。私見によれば、『新撰姓氏録』の最善本は菊亭文庫本だが、研究の過程で、この系統の写本にも問題が残ることが判明したので、写本の優劣を単純に判断することは慎まねばならない。

研究成果の概要(英文)：Shinsen-shojiroku was established in the 9th century. It is the important book which explains the roots of Japanese ancient clans. But unfortunately the original text doesn't exist. Though its abridgments are left, they have lots of writing errors and troubles.

By this project, I tried to look for the best text of Shinsen-shojiroku and made the correct text. First I collected the manuscripts by which were preserved in libraries and compared various manuscripts. In the result, I found out that the manuscript in kikutei- Bunko of Kyoto University's Library. So I made the new text of Shinsen-shojiroku based on this manuscript. But through my study, I discovered that there are also various problems with this book. It's necessary to pay attention when we handle this text.

研究分野：日本古代史

キーワード：新撰姓氏録 原本と抄本 氏族 写本系統

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 『新撰姓氏録』とはなにか

『新撰姓氏録』は、京畿内を本貫地とする諸氏族の系譜を集成したもので、京・山城・大和・摂津・河内・和泉の1182氏の系譜が、皇別・神別・諸蕃に類別してしるされている。現行の『新撰姓氏録』には、弘仁六年(815)7月21日の年紀をもつ上表と、無年紀の序が附されており、これによって編纂の経緯がある程度知られる。田中卓氏の研究によれば、『新撰姓氏録』の最初の撰進は、弘仁5年(814)6月のことで、現行の序は、のちの補訂のあとがあるものの、このときしるされたもので、いっぽうの上表のほうは、翌年七月の再撰進の際に附されたものだという。この序によると、『新撰姓氏録』は、材料となる諸氏族の記録もじゅうぶんに整わないうちに編纂されたらしいが、出来上がったものは、巻数にして30、しかもそれとはべつに目録1巻が存在したというから、龐大なものであった。

『新撰姓氏録』の原本は、鎌倉時代末ごろまでは存在したらしいが、現在では散逸してしまって、わずかな逸文が残るだけである。現行の『新撰姓氏録』は、目録にあった諸氏族名の下に原本の要点を抜き書きした、一種の抄本であって、原本そのものではない。原本が散逸したことは惜しみて餘りあるが、現存する抄本だけでも、古代史料としては価値が高い。

### (2) 『新撰姓氏録』研究の動向と課題

『新撰姓氏録』は、古代史研究の重要史料としてはやくから注目されており、江戸時代にすでに数種の刊本が印行され、明治以後も複数の刊本や注釈書が刊行された。しかし、もっとも研究が進んだのは、戦後になってからである。こうした新研究の牽引車となったのが、佐伯有清氏と前出の田中氏である。佐伯氏の研究は、『新撰姓氏録の研究』本文篇・研究篇・考證篇第1~6・索引篇・拾遺篇の10巻に結実し、田中氏の研究は、氏の著作集の第九巻『新撰姓氏録の研究』に凝縮されている。

両氏の研究でもっとも顕著なちがいは、佐伯氏が延文系本を、田中氏が建武系本を、それぞれ善本と判断しておられる点であろう。延文系本とか建武系本とかいうのは、写本の奥書にある「建武二年(1335)」・「延文五年(1360)」という年号に由来している。戦後、もっともよく利用されてきた『新撰姓氏録』のテキストは、佐伯氏が校訂された『新撰姓氏録の研究』本文篇だが、これは、延文系本の代表的写本である神宮文庫所蔵の御巫清直旧蔵本を底本としている。

これに対し、田中氏は、建武系本のほうが原本の面影を伝えている点のあることを主張し、自身の「新校・新撰姓氏録」(前掲書所収)では、佐伯氏の『新撰姓氏録の研究』本文篇をベースにしながらか、第21巻以降

については、建武系本の古写本である京都大学所蔵の菊亭文庫本『新撰姓氏録』(南北朝時代末から室町時代初期の書写、小槻兼治自署本か)を底本にし、延文系本も併載するという方法を採用している。

こうした底本選定における見解の相違から、古代史研究の基本史料に関して異なる二種のテキストが併存しているのが、学界の現状である。上記のいずれの判断が正しいかについては、なお研究を重ねる必要があるが、看過できないのは、佐伯氏の『新撰姓氏録の研究』本文篇にしても、田中氏の「新校・新撰姓氏録」にしても、校訂の根拠を示す注記に誤記が少なくないことである。

申請に先駆けておこなった予備的な粗調査でも、この種のミスや誤認は、佐伯校本で300箇所を超え、田中校本でも120箇所を超えている。そのため、従来の校本には全幅の信頼をおくことはできず、われわれは、『新撰姓氏録』の利用にあたっては、上記校本に加えて、おもな写本のマイクロフィルムや紙焼きを座右においてつねにそれらを参照する必要がある。こうした現状では、『新撰姓氏録』を利用しての氏族研究の進捗は望むべくもないであろう。

このようにみていくと、『新撰姓氏録』の写本の再調査とその優劣の認定、さらには正確な校異の注記と適切な校訂の成果を盛り込んだ校本作りは、『新撰姓氏録』研究において、もっとも急務かつ重要な問題である。

## 2. 研究の目的

そこで、ここに申請した「『新撰姓氏録』の文献学的研究」では、3にのべる方法にしたがって考察を進め、その結果、『新撰姓氏録』の史料としての基礎を確立したい。『新撰姓氏録』の写本の優劣を確定するとともに、信頼できるテキストを作成することを課題とした。

## 3. 研究の方法

『新撰姓氏録』の文献学的研究は、写本・版本の悉皆調査、その優劣の判別、校訂本の作成の三段階からなり、さらに、その過程で派生する『新撰姓氏録』の原本と抄本の関係の究明が大きな課題となる。そこでまず、24・25年度にわたり、各地の文庫・図書館、さらには個人が所蔵する『新撰姓氏録』の写本の調査・撮影をおこなう。それらをもとに、建武系統と延文系統の優劣をあらためて検討し、26年度には蓄積したデータをもとに、新校本作成に着手し、完成させる。また、これと並行して、同書の内容の分析から、原本と抄本の関係について判明したところを随時学会誌等に公表していく。

### (1) 平成24年度

#### 主要写本の調査・撮影

『新撰姓氏録』(正確には「新撰姓氏録抄」)だが、以下、慣例にしたがって、「新撰姓氏

録」と表記)には、前述のように、建武二年(1335)の奥書をもつ写本と、延文五年(1360)の奥書をもつ写本と、二つの系統の写本が存在する。佐伯氏は、延文系の写本である御巫本を底本として、校訂本(佐伯校本)を作成されている。また、田中氏は、この佐伯校本を底本として、あらたに「新校・新撰姓氏録」を作成されたが、氏は、佐伯校本の底本である御巫本を底本とせず、佐伯校本そのものを底本に選定し、第21巻以降の部分については、その最古の写本である菊亭本を底本として、第20巻までとは異なった校訂の方法をとっている。

これらの校訂本に問題の多いことは「研究目的」の項でも指摘したとおりである。そこで、24年度は佐伯・田中両氏が底本として利用した写本の調査から始め、ついで、校訂に利用した写本・版本の調査へと作業の範囲を拡大した。

#### 基本データの作成

写本調査から得た基本データをもとに校異を確認・整理していく。この作業は、二系統の写本の優劣を判断し、底本を選定するところから始なければならないが、目下の予備調査の段階では、両者の比較から、延文系本には序文が附されていない、延文系本は右京皇別の山道真人の條から撰津国皇別の五字まで、この間13氏についての記載が脱落している、延文系本は第21巻が重出している、延文系本の第21巻以下の記載は、建武系本とはかなりちがいがあ、という4点が判明している。このうち、・は延文系本の大きな缺陷であり、・の点からも、建武系本のほうが原本の面影を伝えているという見通しが立てられる。そこで、こうした見通しを検証しつつ、底本の選定をおこない、その結果を校異の記載にも反映させていく。また、この過程で、佐伯校本・田中校本が底本の文字について誤認している箇所をチェックもおこなった。

#### 原本と抄本の関係に関する考察

上記の作業と並行して、『新撰姓氏録』抄本の成立について考究する。

園田香融氏は、『新撰姓氏録』の皇別にみえる「日本紀合」という注記が『日本書紀』「系図一卷」との一致を示したものだとし、当時、新旧勢力の交替が進み、新しい氏族秩序に即応して『新撰姓氏録』が編纂されるころになると、古い氏族秩序にもとづく「系図一卷」の存在はむしろ邪魔になり、ひいてはそれが「系図一卷」の滅びの原因になったとする。園田説は、『新撰姓氏録』と『日本書紀』「系図一卷」の関係を考えるうえで示唆に富むものだが、はたして「日本紀合」という注記が「系図一卷」との一致を示したものでどうかは判断が難しい。そこで、現行『新撰姓氏録』のなかで『日本書紀』にかかわる記述をあらためて総点検し、そこから抄本と『日本書紀』の関係、さらには原本と『日本書紀』との関係にまで考察を及ぼし、現行『新

撰姓氏録』にみえるような抄出が、いかなる目的でおこなわれたかを考察する。

#### (2) 平成25年度

##### 写本の調査・撮影の継続

25年度は、24年度の調査に洩れた写本・版本にも調査を及ぼし、書写系統を洗い直す(上掲24年度計画の図表参照)これらの写本の調査によって、写本系統を再確認することはもとより重要だが、それに加えて、佐伯校本・田中校本がそれぞれ校異において示した諸本の異同がはたして確かかどうかを検証することが、25年度の調査の大きな目的となる。「研究目的」の項でもしるしたように、両校本は校異の注記が杜撰で、これを正すことなくして『新撰姓氏録』のテキスト研究は先に進まないといっても過言ではない。そこで、25年度の研究はこの点に力を注ぐ。

##### 基本データ作成作業の継続

の調査結果をもとに、電子データ化した『新撰姓氏録』の本文にさらに諸写本の異同に関する書誌的データを追加・注記する。これは、24年度の作業の継続にあたる。

##### 原本と抄本の関係に関する考察

24年度に着手した原本・抄本と『日本書紀』の関係についてさらに考察を進める。

#### (3) 平成26年度

##### 新校本の作成

最終年度にあたる26年度では、24・25年度の写本調査とその比較研究の成果をもとに、新しい『新撰姓氏録』の校本を整理・作成し、一応の成案を得た。その成果は、研究終了後に書籍化したい。

##### その他の研究

このほか、校訂本作成の過程で見出した『新撰姓氏録』抄本成立について知見は、これも研究終了後、個別論文の形で公開していく。

#### 4. 研究成果

まず、3箇年にわたる研究によって、建武系写本がすぐれていることは確認できた。目指す校訂本についても、主要諸本の校合も完了し、一応の成案は得た。しかし、完全な形で公開するにはいまだ少し時間の余裕が必要なので、今後もさらにいくつかの写本を校合に加え、他日の公開を期したい。

ただ、善本とされる建武系の写本にも問題が残る。すなわち、現行の『新撰姓氏録』抄本は、建武系本・延文系本にかかわらず、抄出のしかたが稚拙である。それらのなかには、原本からの抄出時に生じた可能性のあるものも存するが、転写の過程でおこなわれた改変も多くあったと考えられる。「出自」「之後」の異同も、書写の過程での改変の一つで、「出自」「之後」という流れもじゅうぶん考えられる。延文系本には序文が附されていないので、あるいは、「出自」「之後」への書き換えがおこなわれた背景には、延文五年系

本において序文が散逸し、「三例」の本来の意義が失われたこととも関係がある。そうなると、「之後」「出自」という書き換えも、あくまで序文の「三例」の原則がのちのちまでも生きていたという前提に立ったものなので、それが証明できないとすると、「之後」「出自」の「改竄」という見方も成り立たない。したがって、現存の抄本の記載が、どこまで序文にいうところの「三例」を正確に伝えたものであるかは疑わしく、抄本における「出自」「同祖之後」「之後」の書き分けをもって、特定氏族の出自のたしかさを測る物指しとすることはできない。

この研究では、こうした、現行『新撰姓氏録』のもつ問題点を浮き彫りにしたことは、大きな成果であった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

荊木美行、吉林省集安市発見の高句麗碑について、皇學館大学紀要、査読無、53、2015、1-34

DOI 無

荊木美行、白集漢墓とその画像石、皇學館論叢、査読有、48-1、2015、26-65

DOI 無

荊木美行、帝王系図と古代王権、龍谷日本史研究、査読有、38、2015、1-17

DOI 無

荊木美行、五世紀の宮居を探る、つどい、査読無、299、2012、1-13

DOI 無

〔学会発表〕(計2件)

荊木美行、多賀城碑小考、日本書紀研究会2012年12月例会 京都府立総合社会福祉会館4階第4会議室(京都府京都市)。

荊木美行、瀧川政次郎博士と中国法制史、2012年大会国際学術研究会・中国法律史学会第9次会員代表大会暨2013年年会 杭州花港海航酒店(中国杭州市)。

〔図書〕(計1件)

荊木美行、金石文と古代史料の研究、燃焼社、2014、368頁

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

荊木美行(IBARAKI, Yoshiyuki)

皇學館大学研究開発推進センター・教授

研究者番号：60213203